

イタリアデビューを断るといってもったいないお話

1996年6月、私が鹿児島大学医学部の助教授であった頃ですが、「第九」アジア初演の地の徳島県鳴門市（私の生まれ故郷でもあります）で開催された「第15回記念第九演奏会」（指揮：トーマス・ザンデルリンク、ソリストは、ソプラノ：松本美和子、アルト：伊原直子、テノール：米澤傑、バリトン：多田羅迪夫、というように、当時、日本で最高のソリスト陣（私は“鳴門生まれ”ということではあります）で、国際的ソプラノ歌手の松本美和子先生と初めて共演いたしました。その演奏会の前日の夕方に行われたリハーサルの後、松本先生が「後でお話があります」とおっしゃり、「何か歌い方を間違ったかな？」等の心配をしていましたが、特に何のご注意を頂くこともなく、翌日の本番が無事に終わった後、松本先生が「1週間後に、イタリアの高名なオペラプロデューサーのジャンフランコ・パスティネ先生が東京にお越しになるから、是非、貴方の声を聴いていただきたいの!」とおっしゃってくださいました。東京で、パスティネ先生と松本先生に、トゥーランドットの「誰も寝てはならぬ」、ボエームの「冷たき手を」等のオペラアリア、「カタリ・カタリ」「オーソレミオ」等のカンツォーネをお聴きいただきましたところ、お二方揃って、私のイタリアオペラ界へのデビューを強力にお薦めくださいました。

まず、松本先生が「私には実績があります。慶應大学法学部政治学科を卒業して、超一流会社にお勤めであった方を、退職させて、ミラノ・ヴェルディ国立音楽院に留学させ、バリトン歌手に育て上げました。」とおっしゃって、「貴方も歌手に転向して、イタリアデビューをすれば良いのに」と、パスティネ先生と二人で、強力にイタリアで歌うことをお薦めくださいましたが、私が医学・医療の道を変えたい意志がないことをハッキリ申し上げましたところ、「では、オペラシーズンの1ヶ月半だけイタリアで歌い、あとは、医学部で仕事をしていいから」とまでおっしゃってくださいましたが、当時、助教授であった私は「3年後に教授選があり、立候補します。医学部の教授選はかなりの難関で大変ですから・・・」と申し上げましたところ、お二方ともやっとなご了解くださいました。

私は、小学校卒業の際の文集の「将来の夢」に、皆が、野球選手や映画俳優、歌手などと書いていた中で、私は「大学教授」とハッキリ書いていましたので、その頃から、大学での研究生生活に憧れていました。そのような強い意志がありましたので、お二方からの熱心なイタリアデビューのお薦めをあっさりお断りした次第です。音楽界の方々に、上記のイタリアデビューのお薦めをお断りしたお話しをしたことがありますが、「なんてもったいないことを!」と皆様方から言われました。

『amazon』での通販サイトで、私のCD「誰も寝てはならぬ / 米澤 傑 テノール・オペラアリア集」へのコメントとして、「日本にもこんなに素晴らしいテノール歌手が出るようになったのかと驚いた。「天は二物を与えず」とは昔から言われているが、この米澤先生には天は二物を与えた。鹿児島大学医学部教授として病理学の研究を続ける傍ら日本有数のテノール歌手として我々凡人には考えられない。声も素晴らしく、歌も理知的で知性がある。若い頃から歌一本で活躍していたらと残念に思う。まさに日本のマリオ・デル・モナコの声を持つ医学部教授である。」とお書きくださっていて、「若い頃から歌一本で活躍していたらと残念に思う。」とまでおっしゃってくださいしています。

しかし、医学の道を手放して、若い頃から歌一本で活動していたとしても、イタリアオペラ界で“売れっ子”になれたかどうかは、実際に挑戦したわけではありませぬので、何とも申し上げられません。

クラシックバレエや器楽演奏の分野では“売れっ子”になられた方々がいらっしゃいますが、声楽の分野に最も重要な「骨格」そのものに、欧米人と日本人の間に、決定的な大きな人種的差異がはっきりしている以上、いくら日本人が頑張ってみても、声楽の世界での日本人の活躍には「限界」があるのはどうしようもないことであると、私は確信してしまっていて、私も、“売れっ子”の域にまでには達せていなかったと思います。

「医学」と「音楽」の両分野での私の実績を挙げてみますと、「医学」の分野では、日本病理学会で最も名誉ある「日本病理学賞」を受賞、また、がん研究で「高松宮妃癌研究基金学術賞」を受賞し、各種がんマーカー等の論文の著者世界ランキング第6位(日本人トップ)にランクインできました。

「音楽」の分野では、日伊声楽コンクール入選、太陽コンクール・カンツォーネ・イタリアーナ優勝、日本クラシック音楽コンクール声楽部門第1位・全部門でのグランプリ獲得、と各種コンクールでの受賞を果たし、平成10年度「鹿児島県芸術文化奨励賞」を受賞。イタリアと日本で、オペラ「トゥーランドット」の主役のカラフ王子を演じるなど、プロフィールに記されています沢山のコンサートで一流演奏家と共演できましたし、ヨーロッパで録音したCD「誰も寝てはならぬ / 米澤傑 テノール・オペリア集 (G. ステーフانو指揮・ソフィア国立歌劇場管弦楽団)」は、ヒットチャートでたびたび第1位を獲得する等、これ以上ないという音楽活動ができました。私自身としては、「医学」と「音楽」の両分野で、以上のような具体的な実績を残せましたことで十分に満足いたしております。

「鳴門の第九」の「第15回記念第九演奏会」での松本先生との共演をきっかけに、私も妻も松本先生のレッスンを受けるようになり、正確な歌唱法を学ぶことが出来ており、今も歌い続けられています。2018年の松本美和子先生の「喜寿記念リサイタル(東京・紀尾井ホール)」では、数多くの門下生のうち、チャイコフスキー音楽コンクール優勝者の佐藤美枝子さんと私の二人だけ、ソリストとして松本先生と共演でき、私は「オテロ」の二重唱を松本先生と一緒に歌わせて頂きました。“出会い”と“ご縁”は、不思議で、そして、誠にありがたいものです。

(2021年9月2日記)